「地域と共に歩む学校を目指して」

兵庫県立三田西陵高等学校
教諭　坂本　多津子

はじめに

前任校県立山崎高等学校は緑豊かな山々を背景とし、田畑や木々、草花に四季の変化を感じることのできる豊かな自然環境にあるとともに、通学路ですれ違う人びととは誰とでも挨拶を交わすような地域環境にあり、地域の多世代の方々との触れ合いの中で学ぶ教育活動に数多く携わることができた。現任校である県立三田西陵高等学校は、神戸三田国際公園都市北摂三田ニュータウンの発展とともに歩み、今年度学校創立 26 周年を迎えた。このニュータウン地域においても少子高齢化が進む中、今後更なる発展を目指す地域コミュニティと本校がどのように連携し、生徒達の学びにつなげることができるのか模索をしてきた。本稿ではこれらの取組の一部を報告する。

１　取組の内容・方法

（１）県立山崎高等学校での取組

ア　「山高街の駅」での活動

写真１　和菓子店旧店舗での「山高街の駅」の様子（平成 24 年度）

県立山崎高等学校の位置する山崎町は、黒田官兵衛が宍粟郡を与えられ山崎城主になったことに始まり、江戸時代には本多家山崎藩の城下町として栄えた町で、今もその風情を残している。しかし、その中心部に発展した商店街は人通りも少なくなり、静かな雰囲気が日常となっていた。そのような中、平成 22 年度より、県立山崎高等学校が主体となり、通学路の一つともなっている商店街のメイン通りにある和菓子店の旧店舗をお借りし、商店街の活性化に役立とうと地域と学校との交流の場として「山高街の駅」を開設した（写真１）。月１～２回、休日に開店した「街の駅」では、生活創造科の生徒がお店に立ち、自作のお菓子を販売したり、企画したイベントを実施し、地域の方々と交流を深めるよう努めた（写真２・３・４・５）。いずれも、家庭に関する専門学科における「課題研究」や衣・食・保育に関する専門科目、学校設定科目「和の文化」で学んだことを生かすことができ、生徒達にとっては日頃の学びの発表の場ともなった。季節や「最上山もみじ祭り」などの地域イベントをモチーフに、工夫を凝らして創った焼き菓子の数々は当時の生徒達の自信作である（写真６）。

写真２　山高街の駅店舗内でお客様を迎える生徒達（平成 24 年度）

写真３・４　山高街の駅店舗内で地域の子ども達と風鈴作りのイベントを実施、完成した風鈴は日頃お世話になっている商店街の店先にと子どもたちと各お店へ届けた。（平成 24 年度）

写真５　店舗横の駐車スペースに舞台を設置し、授業で練習した和太鼓を披露した様子（平成 24 年度）

写真６　生活創造科生徒が作り販売したお菓子の一例。地域の方々の笑顔が次への励みとなった。

このような活動は、生活創造科、森林環境科学科をはじめとする県立山崎高等学校全職員・生徒の協働により実現できた内容であることは言うまでもない。

イ　地域人材を活かしたふれあい育児体験（平成 23 年度）

毎年、科目「家庭基礎」においてふれあい育児体験を実施させていただいている保育園の子ども達をお招きし、学校の同窓会館にて凧作りを行った。生徒達は事前に播磨一宮凧の会の方々にご指導いただき、凧を作る練習をした。ふれあい育児体験本番では、慎重にバランスを確認しながら子ども達と一緒に凧を完成させることができた（写真７）。そして、凧の会の方が風向きを確認してくださる中、生徒と保育園児が協力して凧揚げに挑戦し、子ども達が絵を描いた凧が青空にぐんと揚がった時にはグラウンドのあちこちで歓声があがった。こうして、凧作りを通して「ふれあい育児体験」は多世代交流へと広がりを見せた。

写真７　地元凧の会の方と一緒に子ども達に凧作りを指導する生徒達

（２）県立三田西陵高等学校における取組

ア　学校家庭クラブ活動

＊「学校家庭クラブ活動」とは家庭科での学びを生かして学校生活や地　域社会の充実向上に生かしていこうというグループや学校全体での活動である。本校では平成 29 年度より２名の家庭クラブ員が中心となり、活動を学校から地域へと広げている（写真８）。

写真８　地域自治会主催救急救命訓練会をリードする家庭クラブ員（平成 29 年度）

（ア）地域自治会「コミュニティカフェ」運営に参加（平成 30 年３月～）

平成 30 年２月、地元自治会が初めてコミュニティカフェを開催（毎月第一土曜日開催）するにあたり、学校家庭クラブ員生徒が参加を申し出た。第１回目（３月３日）では、生徒達はコミュニティカフェの様子を学んだ。そして、第２回目にはより多くの方に来ていただけるよう、生徒達は図１及び写真 11，12 の工夫を行った。第２回目（４月７日）、第３回目（６月２日）とそれぞれの回で飲み物とお菓子の提供を担当しながら、生徒達は地域コミュニティの中に溶け込んでいった（写真 13・15）。大人だけでなく、地域の小学校の児童も訪れ、生徒達は恰好の遊び相手となった。初めは打ち解けなかった子ども達もすぐなじみ、次々と遊びをリクエストする様子から、今後、コミュニティカフェが子どもの居場所としての役割を果たすことができるのではないかと期待できた（写真 14）。

図１　生徒が作成し地域に配布されたコミュニティカフェの案内

写真 11 子ども達も気軽に訪れてくれるようデザインし、協力して作成した窓飾り（４月７日）

コミュニティカフェの目的は地域の方々の交流の場となることであり、毎回たくさんの方々でにぎわうというものではない。それを踏まえ、参加している家庭クラブ員の生徒は「こうして続けていくことが大事。」と意欲的に臨んできた。また、平成 31 年２月の学校評議委員会においては、学校評議委員である地域自治会役員の方より、「このような活動を通して西陵高校のことは自治会でも良く知られています、今後も活動を続けてほしい。」とのお言葉をいただいた。このことを踏まえ、来年度は本校生徒達から発信する新たな形でのコミュニティカフェの開催計画を進めている。

写真 12　飲み物とともに楽しんでいただこうと作ったクッキー（４月７日）

写真 13　カフェで飲み物を提供する生徒の様子（４月７日）

写真 14　訪れた子ども達とオセロゲームで交流する様子（４月７日）

写真 15　カフェに訪れてくださった地域の方々とご一緒に（６月２日）

（イ）西日本豪雨被災地支援街頭募金活動（平成 30 年７月 13 日）

豪雨被災地向け募金活動

三田西陵高生「復興に協力」

西日本豪雨の被災地を支援しようと、三田西陵高校の生徒たちはイオン三田ウッディタウン店で呼びかけた。

神戸新聞　平成 30 年７月 14 日掲載記事
「豪雨被災地に向け募金活動
三田西陵高校生『復興に協力』」

平成 30 年７月５日から８日に西日本を襲った豪雨では、新聞やテレビで日々刻々と豪雨被害よる死者が増え、一瞬にして家族を失った被災者の姿が報道されることに心を痛めた家庭クラブ員の生徒は「このままではいけない。」という思いにかられた。そして、自分たちの力で取り組める街頭募金を行うことを決断するまでには時間はかからなかった。

生徒達は街頭募金を初めて行うにあたって、募金活動に協力してもらえるよう、神戸新聞の記事を用いて豪雨災害の被害の現状をまとめたポスターを作成した。そして、募金してくださった方に感謝の気持ちを表したいと平和の象徴である折り鶴を一つ一つ折って手渡す準備をした。

募金活動当日７月 13 日午後、家庭クラブ員２名とこの活動に賛同してくれたコンピュータ部員・合唱部員と合わせて 10 名の生徒が集まり、近隣商業施設の入り口に立った。初めは皆、少し戸惑い気味であったが、「被災地の人びとの役に立ちたい。」という思いで生徒達は途切れることなく、大きな声で協力を呼びかけた。店に訪れたほとんどの方が足を止め、募金とともに、「(このような募金活動が) もう、そろそろ始まるかなと思ってたのよ。」、「頑張ってね。」と私たちにも応援の言葉をかけてくださった。そして、それに応えるように「ありがとうございました。」と全員でお礼を述べることができた。

この活動の振り返りとして、家庭クラブ員の生徒の一人は「募金活動は初めてだったけれど、地域の方が応援してくださって良かったです。被害を受けた地域が一日でも早く安心して暮らせるように応援したいです。」と家庭クラブ活動の記録ノートに書き留めている。

この日受け取った募金は後日、被害を受けた地域に届くよう、日本赤十字へ振り込ませていただいた。

三田西陵高生ら12人 豪雨被災地訪問

倉敷で家財の運び出し支援

神戸新聞
平成 30 年８月 11 日掲載記事
豪雨災害被災地訪問報告

本校家庭クラブでは「一人ひとりの力は小さいが、集まれば大きな力になる。」をモットーとしてきたが、こうして実際に本校生徒が地域の方々と気持ちを一つにして被災地支援ができたことに私自身も感謝の気持ちで一杯となった。

この活動を契機とし、本校では現地ボランティアチームが組織され、８月に岡山県倉敷市真備町にて活動した。家庭クラブ員２名はこれに参加し、後日、報告会を行った。その後も三田市主催総合防災訓練など、地域での防災活動に積極的に参加を続けている。

イ　総合的な学習の時間における防災についての課題研究（平成 29 年度～）

県立三田西陵高等学校は三田市補助避難所に指定されていることから、平成 29 年度は、「学校が避難所になったら」をテーマとし、『避難所運営ゲームＨＵＧ』を本校の１/50 縮尺の平面図を使って行い、50 人分のアルファ化米の調理と校内での配布体験などを通して、避難所運営の課題について考えた。その中で、避難所での食事の問題がクローズアップされ、平成 30 年度は「災害食」をテーマとし、女性の視点から防災についての啓発活動を行っている神戸学院大学ボランティアサークル防災女子のリーダー２人をお招きして災害食の実際について学ぶなど、地域課題について研究を進めている。

２　成果

表１　平成 30 年度　兵庫県立三田西陵高等学校　学校評価　生徒アンケートより抜粋

平成30年度　兵庫県立三田西陵高等学校　学校評価　生徒アンケート(695名)

	重点項目	実践項目	合計	平均	評価
1	授業・学習進路指導	本校の先生は(シラバスを基に)学習の目標や評価の観点について、説明しましたか。	2098	3	A
2		あなたは(シラバスから)学習すべきこと(学習の目標や評価の観点)について、理解できましたか。	1963	2.8	B
3		授業では生徒同士の対話や、発表、意見交換をする場面がありましたか。	2162	3.1	B
4		本校の先生は大学入試改革を念頭に入れた授業をしようとしていましたか。	1991	2.9	B
5		本校の先生はよりよい授業をしようとしていますか。	2086	3	B
6	部活動	あなたの部顧問の指導は、活性化のための新しい工夫がありますか。	1807	2.8	B
7		あなたの部顧問の指導は、あなたや保護者に受け入れられていますか。	1840	2.9	B
8		あなたの部顧問は、活動計画、会計報告等の保護者への案内をしましたか。	1801	2.8	B
9		あなたは、部活動で技能の伸張や人間的な成長をしましたか。	1953	3	B
10	人間的成長	あなたは、規律ある学校生活を送れていますか。	2350	3.4	A
11		インターンシップ(教育体験実習、看護体験実習、職場体験等)はあなたの意欲や人間性の向上に役立っていますか。	1977	2.9	B
12		いじめに関するアンケート等、本校の取り組みは、いじめのない学校づくりに役立っていますか。	2086	3	B
13		**ボランティア活動、ボランティア清掃等、地区の支援活動は、あなたの人間的成長に役だっていますか。**	2095	**3**	**B**
14		**各種の避難訓練等の防災教育は、あなたの防災意識や人命尊重意識の向上に役立っていますか。**	2155	**3**	**B**
15		人権LHR・人権講演会等は、あなたの人権意識の向上に役立っていますか。	2122	3.1	B
16		スクールカウンセラーは、あなたの心と体の問題解決に役立ちましたか。	1778	2.6	B

※アンケートの回答は１・２・３・４の４段階評価

↑0.4
平成 29 年度２．６

↑0.２
平成 29 年度２．８

今年度生徒による学校評価アンケートの結果によると、ボランティア活動に関する項目、防災意識の向上に関する項目のいずれもが昨年度より向上が見られた（表１）。本校で以前より継続して行ってきた地域ボランティア活動に、修学旅行での防災学習、避難訓練実施方法の改善が行われたことにこのたびの活動も加わり、ボランティア活動や防災活動への参加者が増え、評価結果から地域の人びととの関わりの中での学びが生徒の成長へと結びついていることがうかがえる。

３　課題及び今後の取組の方向性

現任校での取組については、地域の中で役立てていけるよう発展させることが課題である。今後も学校家庭クラブ、総合的な探究の時間、選択科目等において、地域との関わりを持った学びを計画し、社会に開かれた教育課程の礎を築いていきたい。

４　おわりに

今年度、本校は学校防災体制推進校の指定を受け、学校防災アドバイザー兵庫県立大学大学院　減災復興政策研究科防災教育研究センター教授・学術博士　森永　速男氏より、本校の防災体制についてご指導いただく機会があった。その中で、地域と連携した防災活動を進める方策についてお尋ねしたところ、「日頃から地域に出向き、地域の活動に参加することです。そうして顔見知りになっていることがいざというときの連携につながります。」とアドバイスをいただいた。また、西日本豪雨被災地支援募金活動の取材をしてくださった記者の方が、「このように高校生が頑張ってくれていることは地域の方々の励みになるのです。」とお声掛けくださった。このように地域社会も高校生の活躍に期待をしてくださっていることを改めて念頭に置き、今後も生徒・地域の方々が学び合い、共に「ありがとう」という気持ちが生まれるような活動を目指したい。